

絵画教育研究（その2）

—幼児・児童画の心と基礎デッサン入門—

古賀隆一

Picture Education Study (Part2) : Psychology of an Infant and the Picture
Painted by a Child and Introduction to Basic *Dessin*

KOGA Ryuichi

キーワード：創造教育 発達段階 むり絵の悪影響 感性を磨く 抽象表現

要約：本論は、造形表現の教育現場で指導者が直面する幼児・児童画（以下、幼・童画、又就学前は幼児画）の描画心理の受け止めに必要な《感性》を学習する授業の実践教育研究である。幼・童画の援助や指導の方法は、その描かれた絵画の《心》を受け止める感性を磨くことが、学習のポイントとなる。特に子どもの描く絵を理解する上で、学生が大人として学ぶ絵画学習は、心理、感性、の働きの捉え方が要素として関連しているので、基礎デッサンの学習は、作画の要素に必要とされる抽象性を学ぶことに通じる。教育現場の経験から基礎デッサンを通して、造形教育(援助と指導)の主要課題を考察する。(その1)では、デッサン教育と幼児画教育の関連を中心としたが、本稿では球形のデッサンの課題を中心に、立体の捉え方を述べる。又、『むり絵』の輪郭線の関係と問題点、『むり絵』が成長期の子どもに与える悪影響の理由と関連する文献から、背景となる課題を研究対象とした。

1. はじめに

本稿は、幼・童画教育に携わる教師や保育者が、学ぶべき幼少期の発達段階の理解と、幼・童画教育とりわけ自由画教育が創造教育として感性を育む時期に必要なとされる人間教育研究である。そもそも幼・童画の理解とデッサンの基礎教育は、教員養成に必要な指導力を身につけるための感性表現の教育技術に他ならない。次に、描画に関連して周辺のエデュケーション現場に『むり絵』が持ち込まれている事実が複数報告されているが、特に幼児期の『むり絵』には教育上大変な問題点があり、このまま放置することは、極めて大きな禍根を残すことになる。『むり絵・切り絵』と言った類は、一部の教育現場で行われている〈時間つぶし〉の悪しき風習であり、原因は指導者（現場教師）や一般の大人が創造教育に対する《無知》であることによる。絵画は創造性や感性に深く係るが、絵画教育に関連しない『むり絵』は、教育上何ら意味が無いばかりか、幼児期に最も悪影響を及ぼし創作活動でない単なる労働に過ぎない。

2. 研究課題

まず、幼稚園教育要領（文部科学省）、保育所保育指針（厚生労働省）の「表現」から考察する。保育所保育指針、における保育の内容、幼稚園教育要領第2章 ねらい及び内容の中で「表現」においては・・・感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。（一部抜粋）このことを踏まえ幼・童画教育に携わる教諭や保育士は「創造性や感性」を育む教育とは何か、幼児期の発達段階に応じた「援助と指導」の意味を考える。幼児画の理解の為に必要な指導者の描画力は創造、創作、感性、感覚を磨く事に他ならない。指導者育成機関において、デッサン学習の描画力（絵画とは何かを知る力）が幼児画を観る目を育て幼児画の「援助・指導」に繋がる。創造性のない『むり絵』が、幼稚園や保育の現場で作業として与えられている事実は、先に述べた幼稚園教育要領や、保育所保育指針が示す内容に反する行為である。

3. 課題設定理由

デッサンの学習と幼児絵画教育との関連は、絵画の本質を理解する観点から、立場や次元の違いはあるが、感性の働きや心理描写と関連している。デッサンの実技学習は、明度表現の描画であり、モノトーンに含まれる明度（明るさ）の要素の中に、やがて色相（色み）彩度（あざやかさ）の関連が見えてくる。表現することとは、即ち物に物の質感を含めた感覚的感情的な要素が求められてくる。そこで異次元の幼児画を考えてみる。創造的感性の表現である幼・童絵画は心象を表す抽象表現である。特に幼児の発達段階からみた幼児画は手運動と視覚が交差し感性の働きを総合したものである。この稿では「球体」の描画法を事例で取り上げるが、特に「球のかたち」を輪郭描写での立体表現はあり得ない。この例は、面で捉える学習として美術教育で取り上げている授業研究である。又、幼児・児童教育上意味のない『ぬり絵』とはどのような関連、問題があるのか明確にしたい。幼児期の『ぬり絵』は教育現場、家庭内に於いても排除（理由は、文献抜萃に示す）すべき由しき課題である。

4. 研究の趣旨

幼少期の発達段階における絵画研究と、指導者の描画法の教育研究を同時に考えることを趣旨として研究を進めている。本学の学生にアンケートで、これまで学んできた美術の学習について研究をしているが、基礎学習の教育が足りないのが実態である。その上、幼少期の体験の中に《発達段階》を無視した押し付けの教育や、「自由画」を学習評価の対象と捉えられた経験を持っていると考えられる。子どもの成長を植物に例えると、始まりは土壌である。従って種子を蒔く以前の段階と考えるべきだろう。土壌の質を高め将来に向かって豊かな実りを得る為に働きかける考え方が教育の根底にあって然るべきである。幼児教育は人を育てることであり、物事の本質を学ぶことが基礎となる。本論実習例の球体「形」は、輪郭線だけで描く事は出来ない。立体感を表現するには当然、表現の基本技術が必要になる。

5. 研究内容

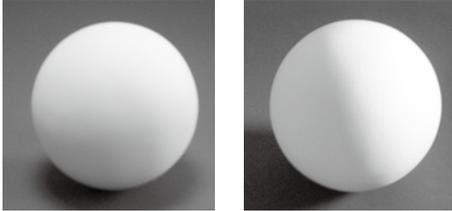
はじめに、球体を描く実習と輪郭描写の比較関連について考察する。（その1）で述べた教育研究内容は近代の美術後期の考え方のみならず、中世期に確立した画法や技術の踏襲である。古代ギリシャ、ローマに学んだ中世期の絵画研究は近世、印象派の出現で絵画の本質の研究が完成されたといつて良い。青年期に於ける学習の方法として、形を描く訓練はその考え方に普遍性はあるが、個人個人のその後の創造活動の方向や変遷は自由であり、各々発展、展開、考え方も個人の資質によることである。印象派の画家セザンヌ（仏）が言った自然を立方体、球体、円柱、円錐形に置き換えるという考え方（見方）は、画面構成あるいは再構成の上で必要不可欠な考え方で、デッサンの入門研究では当然避けて通ることは出来ない。地球上の万物が質、量を持っている以上、絵画は虚像であるが描かれる形は立体的に捉えるべきであり、そこには形を構成する面の存在を忘れてはならない。教育研究では、面の存在をどのように説明して描く方法、技術をどのように伝えたら良いか、面を描く教育方法（具体的に教育現場で指導してきた内容）をまず示しておきたい。幼児教育に於ける『ぬり絵』の問題については既に研究が進んでおり文献から抜萃または要約引用してその問題点を明らかにしておきたい。一方に於いて輪郭描写の研究は『ぬり絵』等とは次元の違いがあるので語るに及ばないことであるが、誤解を招かない説明は必要であると考えている。

実技実践・・・石膏幾何形体「球体」の表現の教育技術

【資料…1】球体モチーフ〈石膏モデル〉（光のアンゲルと見え方）

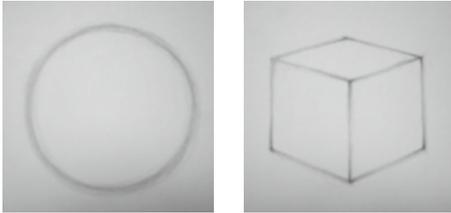
形は光の存在無しに見ることは出来ない。描く技術は光と影の関係も避けられないが、描画に於ける明暗は、必ずしも光と影の関係で描くのではなく、〈明るい色と暗い色〉として捉える考え方で臨む姿勢が解り易い。光と影は表面的な視覚の捉え方で量的な捉え方や質的な捉え方が弱くなり表面の現象を追うだけになってしまう。形を捉えることは物の内面やその存在を証明することでもある。デッサンの学習は、感性を磨く学習として

考えると一層理解が深まるであろう。つまり形を描くことはただ単に目と手で写すことだけでなく目を通して心の働き（感動・感性）を手に伝え働きかける事に他ならない。従って画面の構図等を除きカメラのレンズを通して写真を撮ることや漫画やアニメといった説明図とは意を異にする。



【資料…2】「球体」の捉え方とその考え方

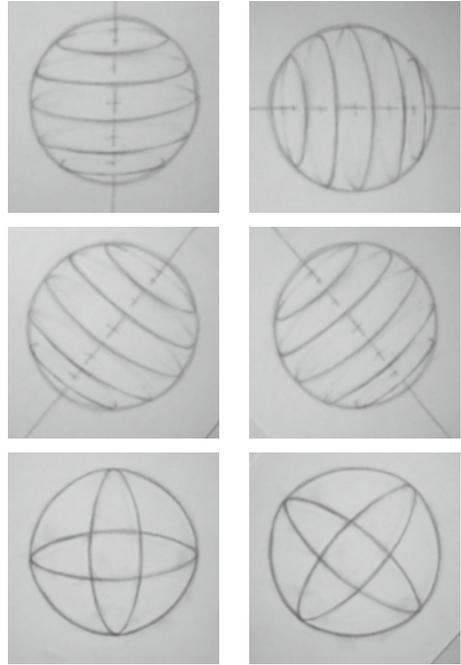
資料により理解出来ることは、『球体』は円を描いても輪郭線では概念的に立体を表現する事は出来ない。（その1）で取り上げた正立方体の場合は輪郭線でも、概念として立体を感じる事が出来る。輪郭線で捉える形は、線という概念が立体の面に相当するという理解の上であるならば受容されるだろう。



【資料…3】球を楕円で描く理由と事例：

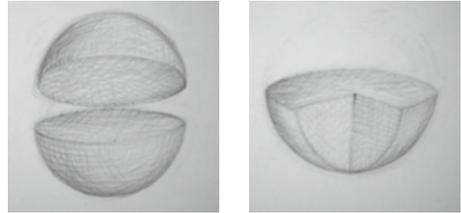
・球体が立体であること、断面の楕円の大きさや見える角度から楕円形の変化を概念的知識として学んでおく必要がある。中心軸に対する楕円を描く。中心軸の角度を変える。楕円を描く線は筆圧を変えて表現する。

筆圧とは、文字通り線の強弱を指すが、一本の鉛筆の線の色で表現することである。筆圧のみを示す作例は掲載していないので【資料…5】を参考例とする。暗い部分は筆圧を高めて黒っぽい色を出す様にする。また、鉛筆を起こして先の尖った部分でタッチ（筆触）で描くようにする。筆圧の強弱に関わらずタッチを残す描き方は、紙の目が潰れず微妙な色を出すことが出来る。鉛筆デッサンの筆圧も大切な技術である。



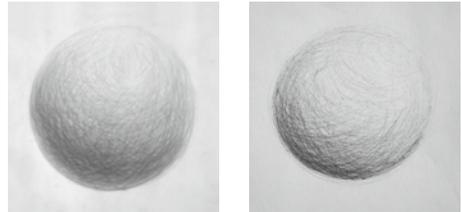
【資料…4】球の内部構造を考へてみる事例：

・球体の内部を分解して量を見る。



【資料…5】作画例：

・線描に於ける球体の表現は、すべて楕円を使うが、楕円の曲線は明るい暗いといった調子（美術用語）に合わせて強弱（筆圧の加減）が必要となる。



（鉛筆画）

（ボールペン画）

【資料…6】球体に関連した形の仲間（林檎、南瓜、トマト、卵）の作画例

・球体に類似する形は地球をはじめとしていろいろな所に存在する。ここでは球体ではないが、球体を理解すれば描ける形を参考例として取り上げ

た。この様に類似する形を基本形に置き換える考え方は、自然から物の形を捉える際に適切な方法である。(作画例は鉛筆画)



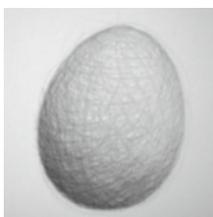
(林檎)



(南瓜)



(トマト)



(卵)

※本稿においてデッサン教育と『ぬり絵』について述べているが、資料に『ぬり絵』の事例が無いのは、幼児教育に不要であるばかりでなく、成長期の子どもに悪影響を与える点で事例を示す意味はない。尚、年配者や成人の《ぬり絵》あそびは、代理満足と単なる作業(制作ではない労働である)としての位置付けから、美術教育(特に幼児教育)、創造教育とは無関係であるのでここでは割愛する。

保育内容指導法(造形表現)2年生後期授業内容から

幼児期の造形表現とりわけ絵画表現に関しては、援助と指導のうち援助に対する考え方は幼児児童期の発達段階を学習することが何より大切なことであり、環境の整備(絵を描く為の場所や制作の準備)が成長を育むことであることに他ならない。指導とはいえず子どもには(教える行為)は無用なのであり、子どもの絵から学び取る学習こそが子どもを理解する教育に他ならない。絵画(基礎デッサン)の学習は、子どもの絵画から学ぶ為に必要なことであるが、それは自分の力で想像、創作力や感性を磨く事に繋がるのである。以下に抜粋した文章は、誤った指導を受けて絵を描くことが嫌いになったり、創造することの芽を

摘みとられてしまう原因や理由を述べたものである。

以下、2012年12月保育内容指導法(造形表現)授業の配付資料である。幼児教育のこの分野の研究は進んでおり部分引用も不要と考え抜粋文で構成した。

『子どもが絵を描くとき』磯部錦司著・一芸社・2008

P91第8章子どもの育ちを歪める大人の言動・・・(一部抜粋)

1. 絵を描くことが嫌いになるとき

<絵を描くことが嫌いになった理由と時期>・・・18歳～25歳男女355名対象2003年アンケートによる

- ・私の隣で描いている友達に「上手に描けているね」と誉めているのに、先生は、私に対しては「もっとここはこうしたほうがいいよ」と注文をつけてくだけだった(幼児期)。
 - ・比べられて自分の絵が劣っていたら、自分も否定されているみたいで悲しくなった。比べられることがなければ好き(小学校低学年)。
 - ・強制的に描かされて余計嫌いになった(小学校低学年)。
 - ・思い描いた絵と、実際に描いた絵のギャップが激しくて自分は下手だと思った(小学校中学年)。
 - ・それまでは、上手や下手に関わらず好きだったが、自分が上手じゃないと自覚しはじめ嫌いになった(小学校中学年)。
 - ・絵というものが評価される対象であると感じてしまった(小学校中学年)。
 - ・楽しんで描くことよりも、技術を要求されるようになった(小学校高学年)。
 - ・まわりの人の絵をみていろいろと考えちゃってから苦手になってしまった。形のあるものを描くのが苦手になってしまったから(小学校高学年)。
 - ・「こういうふうには描きなさい」とか先生にいわれて、自分の描きたいような絵が描けなかった。自分の絵より先生の絵見たいに思った(中学生)。
 - ・自分が気に入っていても通知表の点数が悪かったり、成績が良くなかったから(中学生)。
- 嫌いになった理由は、年齢によって微妙に異なっていますが、低年齢ほど、大人の言葉や態度によっ

て傷つくことが大きいことがわかります。

2. 社会に潜む結果主義・効率主義

どうして多くの子どもが、絵を描くことを嫌いになってしまうのか、その理由を分析していくと、社会や教育にある理不尽なことや、大人の間違った考え方が見えて来ます。これは、「子どもの絵を大人がどう捉えるか」という問題ではなく、「子どもをどのように見ようとしているのか」「子どもをどのように育てようとしているのか」という、社会全体の価値観や教育感に関わる問題にまでつながるのではないかと思います。先のアンケートからもわかるように、いかに大人の言動が、その子の意欲をなくさせていたり、描くこと自体を奪っていたりするのかが見えてきます。

子どもは、作家や絵描きになるために絵をかいているのではなく、大人も、絵を通して見方や感じ方、考え方を広げ、豊かな生き方をしてほしいと願っているはずなのですが、結果主義や効率主義にまどわされて、大人が子どもに要求することが結果として、絵を嫌いにさせてしまったり、描かせなくさせてしまったりしているのです。

これは、その子どもの可能性を摘んでしまったり、一つの生きる喜びを奪ってしまったり、その子の豊かな人生へのマイナスな働きかけになってしまっていることに気づく必要があります。

まわりの大人だけでなく、教育のシステムや有様にもその原因はあるように思われます。しばしば小学校の研究授業というものに参加させていただくのですが、ある授業の後に校長先生がその授業者に「今日の一時間で子どもたちはどんな力をつけたのか、何がマルで何がバツなのか」と聞かれたそうです。図工や美術の一時間の授業でどんな力がついたのか、などということは正直とても難しい問題です。図工や美術で本当につけたい力というのは、これから何年後、いつ現れるのかもわからない、将来活かされる力であって、子どもたちが絵を描く過程で絶え間なく拓かれていく豊かな出会いの連続によって、その力はつけられていくのです。

たとえば、筆の使い方がわかったとか、色の混ぜ方がわかったとか、技術や方法の習得がその力

であれば、その一時間で答えが出せるでしょう。しかし、絵を通して子どもたちに身につけて欲しいことは、もっと彼らのこれからの人生や生き方に関わる、感じ方や考え方、感性や創造性、主体性に関わる問題であって、むしろ一時間の授業でどうこう判断できないところに大きなねらいがあるはずです。

3、だれのための絵であるか。4、「上手」という言葉でしか評価できない大人。5、写実的、客観的、視覚的な価値観に支配された大人。6、過程でなく結果でしか見ようとししない大人。7、比較することでしか評価できない大人。（3～7は表題のみ、内容は省略）

8. 形や色を教えてしまう大人

子どもが、自分の思いや感動を伝えようとして描いた絵は、いくら色や形が未熟であろうが、見る人の心に伝わるものがあります。子どもが、表現することの満足感を味わうということは、人間として生きる喜びを知ることであり、子どもなりに、芸術的な歓喜を経験することでもあります。

本来、絵を描くということは、どの子にとっても楽しいことであるはずですが、しかし、幼児期から既に描くことが嫌いな子がいるのはなぜでしょうか。それは、その子にとって絵を描くことが楽しくなくなったからです。自然なその子なりの発達を無視されて描き方を教えられたり、ありのままの素直な表現を喜んでもらえなかったり、受け入れてもらえなかったからです。

クラスの壁に絵が貼られたとき、「どうして、ほかの子は人の形が描けているのに、うちの子は、顔から手足が出ているような絵しか描けないの」といって、家へ帰って人の形を教えたという話を聞いたことがあります。また、「自転車はこうでチュウリップはこうよ」と教えているお母さんを目にしたことがあります。「子どもの絵は、教えるものではなく育てるものである」といわれています。自然な発達の中で、その発達にそった絵をかけるようになるわけで、そこで形を教えても何も意味はないのです。

幼稚園の年長や小学生になると、ほかの知的なものが発達してくるにしたがって、親や人の目を意識して、まわりと違って自分が同じように描け

ないことに気づき、白紙のまま何も描かなかつたり、ぐしゃぐしゃと塗りつぶしたりする子どもがいます。また文字は描けるのに絵は描かない子どももいます。「どうしてうちの子は」と尋ねられますが、それは、2歳なら2歳の、3歳なら3歳のときに、その子の自然な発達にそって、自由にのびのびと描くことをしてこなかったからです。その自然な発達を無視して、突然に胴体から手や足が出て横向きの人が描けるということはないのです。それは発達が遅れているということではなく、その子にはその子の発達があるということです。その子そのときの素直な表現を受け入れてあげることが大切です。教えるのではなく、広告の裏やいらぬ紙でいいので、どんな落書きでも自由にのびのびと描ける環境をつくってやるのが大切です。

人の顔や自動車や花を、「ねえ、かいて」とせがまれるとついつい描いてあげるのは人情です。しかしそこは我慢してみたいものです。子どもの絵と大人の絵は違います。大人が描いた絵は、所詮、大人の絵であって、まったく違うという前提に立って子どもの絵を見ようとすれば、安易に形を示してしまうことはできないはずで、絵を描くということは、文字と違って形や約束ごとを覚えることではなく、自分の思いを形に表現することです。なぜなら本人が創造し作りだすものだからです。大人が形を示しても、それは彼らの創造性を潰すだけです。それを繰り返していくと自分の感覚で働きかけるということができなくなり、その結果、感覚も発達しないということも起こりえます。これは絵だけの問題ではありませんが、「ねえつきはどうするの、次は何かくの」という指示待ちの子どもが増えてきていると聞きます。「自分の目で見て、自分の言葉で話して、自分の考えで表現していく子どもを育てたいものです。子どもが「かいて」というときは「形をかいて」というより、「一緒にかこうよ」ということのほうが多いようです。そういうときは、形を教えるのではなくておしゃべりでもしながら、一緒にそばにいてあげればよいのです。また、今まで描いてあげていたのに、急にそれをやめても子どもは不信感しかいだきません。そのようなときは、で

きるだけ、その子のはったつに応じた影響の少ないシンプルな形を示し、その子が自分から描いていくようなお話をしてあげればよいのではないのでしょうか。

形を教えることと同様に、ぬり絵も、子ども自身が創造した絵ではありません。大人の作った概念やパターンを形式的に塗りつぶす作業にしすぎません。そこからは、子どもの思いは何も聞かえては来ません。同じように、自分の絵を描けない子を育てるだけです。

自発的に自分から何かを生み出していこうとする習慣をなくしていくことにもなりかねません。輪郭の中をきれいにはみ出さないように塗りつぶすという技術も、幼児の時期では無意味です。小学2、3年生になって、指先のコントロールができるようになるころにそれは身につけていくことです。だからといって、ぬり絵に一生懸命になっている子に、「これはいけないからやめなさい」というのではなく、もっとその子が自分から関わっていきたくることや、楽しいと思える生活や環境を作ってやるのが大切なのです。

また、マンガのキャラクターをそっくり上手に描くことも、それは単なる技術であって、その子の心の表現をそこに見ることはありません。これもまた子どもの問題ではなく、それよりもっと楽しい豊かな生活や、子どもが自ら関わりたくするような環境を作ってあげない大人の問題です。

『表現・幼児造形』〈理論編〉編著林 林男、保育出版社2008・・・(一部抜粋)

保育での描画指導のポイント・・・I、幼児の描画指導のポイント

描かない子どもの原因と指導

- ①描いた作品を表現の巧みな子どもと比較されたり、兄弟や親に批判された経験をもつ。
- ②作画中に、親の干渉や手の出し過ぎにより自信を失い、自分で考え、工夫する気力を失っている。
- ③友達の絵のまねして指導者に注意された経験をもつ。
- ④幼児期より指導者や親の手本に描いたものを写し描きをさせられ、劣等感を抱いてしまった。
- ⑤幼少より『ぬり絵』などをしてきたために、大

人の描いた形を頼るようになり、工夫する力がなくなっている。

⑥なぐり描き（ぬたくりともいう）を充分にした経験がなく、早くから形の整ったものを要求されてきた。

⑦衣服を汚すことを厳禁された中で育てられてきた。

⑧幼稚園、または保育園に入るまで筆記用具を持った経験がない。

・・・Ⅱ、他人のまねをして描く子どもの指導について

⑤の『ぬり絵』に起因する。印刷された絵に頼っているの、頼る形のないところでは周囲の友達の絵をまねしなければならなくなってしまう。・・・後略

『なぐり描きの発達過程』W.グレッツィンゲル著、黎明書房・1978（一部抜粋）

画を描く子どもをもつ両親のための十戒
四、お手本を見せてはいけません。無理やり自然を教え込んではいけません。p 121前後略

『子どもの絵』ビクター・ローエンフェルド著、勝見 勝訳・白揚社1956・・・（一部抜粋）P35、2わたしたちは、子どもの芸術をどんな風にじゃましているのでしょうか。

- ・ぬり絵について、（全文抜粋）
- ・切り抜きとお手本について、（全文抜粋）
- ・子どもの芸術を手伝ってもよいか？
- ・間違っているつりあいはおすべきか
- ・子どもの芸術は何時もほめるべきか
- ・子どもの芸術は批評すべきか
- ・子どもの芸術は人のきにいらないか
- ・子どもの作品を壁にかけてもよいか

好奇心の強い読者は、芸術を導くということより、それを妨げるという議論から話を始めるのは、何故かと問うでしょう。私の確信するところでは、家庭の雰囲気は子どもの芸術にもたらす最大の貢献は、子どもの自然の成長を妨げないということです。たいていの子どもは、おとなさえ彼

らを束縛しなければ、のびのびと創造的に、自分自身を表現します。

じゃまといっても両親は子どもの為と思ってやっているの、じゃましているなどはつゆほども思いません。たいてい妨害は、子どもの本当の要求を充分理解していないからです。この要求は子どもが成長するにつれて変化します。わたしたちが、自分自身を子どもの位置においてみるのはたやすいことではありません。そのためには、子どもの思考、感情、知覚を知っていなければならないので、教育における、もっとも難しいことの一つになっています。

たとえば、なぐり描きをする三歳の子どもは、紙の上になぐり描きの動作をしているときは全く幸福です。ところが両親は、子どもがただなぐり描きを練習して自由な動作を覚えなければいけないということを知らないで「何を描いているの？」とたずねたりします。子どもは、何も連想しないで、ただなぐり描きをして、思うままに動作ができるというよろこびしか感じていないので、両親の質問の意味がわからず、何の反応も示しません。好奇心の強い両親は、なぐり描きの意味も知らないままに、ただよかれと思って、「リング描いてるんじゃないの？」と続けてきます。三歳の子どもは、絵については何も考えていないということを知らないのです。子どもは何を言われているのかわからず両親の顔を見守るでしょう。子どもにとって、リングは食べたり、においをかいだり、手に持ったりするもので、絵に描くものではありません。リングの絵を描くなど、この三つの子どもには、まだ想像もつきません。しかし好奇心をおこして、「お母さん描いて」と言うでしょう。子どもに《役立って》あげたいと思って、お母さんがリングを描いてあげると、子どもは両親をよるこばせたいと思ってリングの絵を描こうと思います。もうなぐり描きをやめて、リングの絵を真似しはじめます。子どもには、線の絵など、とても本物とは思えず、ただ何かの輪のようなものがあると思えません。今度、両親がジョニーのそばに行くと、ジョニーは紙いっぱい小さい輪をかいてあるのを見せます。それがなんだかわからず、「それは何？」とたずねると、

ジョニーは得意そうに、「りんご」と答えます。

〈ため〉を思ってやったことなのですが、自分自身を表現したいという子どもの要求を、妨げてしまったわけです。創造活動、この場合はなぐりがきですが、それがジョニーにどれほど重要であるかを理解したなら、この邪魔がどういう影響を及ぼすか、よくわかるでしょう。ジョニーは自分の腕の動きと、紙の上のなぐり描きの線には関連があることを、発見しようとしていました。動作とその結果との調整は、ジョニーのこれからの成長にとって非常に重要です。彼の重要な感覚のひとつのこの種の調整に、歩き回ったり、手先が器用になったり、あるいは話したりする能力はかかっていますが、それは舌の動きと、その結果との調整が、ここではとくに重要になるからです。私たちは、子どもが一人で発見することを妨げ、またこういう独立した行動は自身をつけるものですが、それをも妨げました。自分の思うままに線を引くことが出来るという事実からうまれた自信は、子どもにとって重要な経験です。私たちは、子どもからその経験を奪い取る権利はないし、またそれを奪い取ることは、ほかの行動においても、子どもの自信をそこなうことです。

私たちはまた、子どものなぐりがきに対する素直で実験的な接近を中断しました。子どもにきまりきった繰り返しをさせることは、子どもが新しい位置を一人で発見して、たえずそれに適応することを妨げます。こうして、ジョニーは成長したとき、メリーのように、創造活動を利用して、いらいらした時や、いきいきと感じたとき、自己を表現する手段にすることが出来ません。もしも私たちがジョニーを邪魔しなかったら、ジョニーはなぐり描きを自然な活動の一つとして続けるでしょう。こういうわけで、始めにこの問題をとりあげたのです。

ぬり絵について

子どもにぬり絵をぬらせることは、子どもの芸術的活動の要求を満足させるために、私たちがとる最も普通な手段です。ぬり絵は普通、輪郭の線だけかいてあって、子どもが中をぬる様になっています。ぬり絵は10セントストアで、たやすく買えるので、子どもに簡単に与えられます。しかし

はじめに言っておきますが、ぬり絵は十中八九まで、子どもに、そして子どもの芸術に、ひどい悪影響を及ぼします。

ぬり絵の子どもへの影響を理解するために、ぬり絵を使っている子どものプロセスを見ていきましょう。そして、このプロセスが子どもに及ぼす影響を発見しましょう。

子どもがはじめてぬる絵が犬の絵だと仮定しましょう。子どもは、輪郭線にぬっていくしごこちは始めるやいなや自分自身がそれにどうつながりを持っているか、創造的に解決するのをじゃまされてしまいます。犬に対する子どものつながりは、愛情であるかも知れません。友情、嫌悪、恐怖であるかも知れません。しかしぬり絵では自分のつながりを表現し、はりつめた喜び、嫌悪、恐怖の感情をときはなすことはできないのです。ヴァージニアの、個性の違いも表わせません。ぬり絵には、ひとりひとりの違いのための準備などはないので、輪郭のなかをぬりつぶすことは、同じタイプの活動におちいらせません。勿論、こんな事は何も知らないジョニーは、生来の不精もあって、犬をぬるのを楽しんでいます。しかしクレヨンでそれをぬりながら、自分はこれほど上手く犬を描けないと思います。この仕事を終えたとき、ジョニーはとても得意に思います。とうとう犬をぬりあげた、と。のちに、学校かどこかで、何か描くように頼まれると、ジョニーはぬり絵の絵を思いだし、そして、とてもあれとくらべられる絵は描けないと思って、きわめて論理的に「描けない」と答えます。

「でも、私の子どもは、ぬり絵が好きですよ」大勢の先生や御両親はこうおっしゃいます。確かにそうです。ジョニーも好きです。しかし、ふつう、子どもには、自分のためになるものとならないものの区別はつきません。子どもが好きだといっても、それが必ずためになるものとは限りません。たいていの子どもは、野菜よりお菓子が好きだし、またいつでも食べたがります。だからといって、子どもの食事を、お菓子にしなければいけないというわけではありません。子どもは一度世話をされると、それを好むようになります。それにたよりすぎて、もう自由をよるこばなくなり

ます。私は数えきれないほど何度も、両親が何もかも子どもの為にやってあげるのを見ました——子どもはただ足をなげだしていると、靴ひもがむすばれ、向きを変えると、髪がとかされる——それはほとんど機械的なくらいです。こういう子が玩具に囲まれながら、それをどうするか知らない、そしてキャンプに行っても、ほかの子が伸び伸びと遊んでいるのに、ひとりぼっちですみっこにすわっている子どもなのです。

子どもは一度ぬり絵に慣れると、自由に創造して楽しむことがなかなかできなくなります。ぬり絵が子どもにうえつける依頼心は、恐ろしいほどです。実験と研究の結果、ぬり絵をぬった子どもの半数以上が創造力、表現の自主性を失い、融通の利かない、依頼心の強い子どもになってしまいました。

先生の中には、ぬり絵は、子どもに、一定の輪郭内を、はみださないようにぬることを教えると、おっしゃる先生があるかも知れません。しかしこれも実験の結果、まったく間違っていることが、証明されました。ほとんどの場合、子どもが自分で描いた絵より、ぬり絵の方が、輪郭線より色のはみでています。もしジョニーが自分の犬を描くとしたら、何のつながりも持たないぬり絵の犬をぬる時より、自分の輪郭から色のはみでないように努力するでしょう。

こうして、ぬり絵は、疑いもなく子どもを、依頼心の強い（子どもが欲するものを創造する自由を与えないので）、柔軟性のない（子どもは与えられたものに従っているだけなので）子どもにしてしまいます。また、子どもの経験を表現させて、その感情をとき放すチャンスを持たせないの、気分的安らぎを与えないし、その上、子どもはぬり絵で表現欲を満たそうとしないから、絵を完成させたいという衝動もないので、絵の技術がうまくなったり、絵の練習になったりしません。最後に、ぬり絵は、子どもがひとりでは生みだせない大人概念に、子どもをしばりつけてしまうので、子どもの創造意欲をはばんでしまいます。

切り抜きとお手本について

ぬり絵と同じことが、切り抜きとお手本についていえます。切り抜きとお手本はひとりひとりの

為に違ったように、つくられていないので、子どもの自然な表現を妨げてしまいます。イースター祭に、私は二年生のクラスに行ってみました。教室のまわりには、イースターの切り抜きをぬったものが、貼ってありました。私が子どもの一人に「アン、どれがあなたの？」とたずねると、うさぎを見まわし、指を口にくわえて「知らない」と答えました。しかし、突然頬を赤くさせて、あるうさぎを指し「これよ」と答えました。「どうしてわかるの？」とたずねますと、アンは親指が汚れていたの、そのあとが付いているからと答えました。汚れがアンの唯一の証明だったのです。子どもはただ汚れだけで自分の作品が見分けられるのだと思ったたら、私は身ぶるいが出ました。今度は先生に「どれがアンのうさぎですか？」と尋ねると、先生はいくらかいらいらした口調で「ひと組に40人も生徒がいます。どのうさぎがアンのだか、わかりっこありません」と答えました。先生は、子どもの為を思っているに違いありません。しかし、先生の教え方はそれぞれの子どものよって、それぞれ違った手引きをしているとは言えません。事実この様な教室は全体主義的考えに生徒を導くでしょうし、子どもたちは、その表現方法を組織化されてしまい、皆同じようになってしまいます。個人的違いは許せなくなってしまい、こういう雰囲気の中なかでは、個人は自分の表現に自信を失ってしまうに違いありません。子どもは、お手本に慣れてしまうと、何時もお手本を期待するようになり、お手本がひっこめられると、どうして良いか分からなくなり、想像力を一人で働かせる自信をなくしてしまいます。

切り抜きが子どもの技術を向上させないのは、ぬり絵が子どもの腕を上げないのと同じです。自分で絵を描いてその線を切る方が、“きめられた”また余り分かり良くない線をきるより、ずっと注意深く出来ます。

『美術による人間形成』ピクター・ローエンフェルド著 (本文は省略)

P39、第2章、初等教育における創作活動の意義、(以下、要約した図)(一部抜粋)

自己表現	模倣
子ども自身の水準による表現	_____ 異なった水準による表現
自立的思考	_____ 依存的思考
情緒的発散	_____ 欲求挫折
自由と柔軟性	_____ 抑制と束縛
新しい情勢に容易に適応する	_____ 決まった型にのみ従う
進歩、成功、幸福	_____ まね、依存、頑固

6、要約

絵画教育の中で幼少期の絵画指導に於ける〈援助と指導〉は、大人の絵画と子どもの絵の基本的な違いを理解することである。教師や保育者が、学ぶべき幼少期の発達段階の理解と、幼・童画教育とりわけ自由画が創造教育として感性を育む時期に必要とされる人間教育研究である。大人(指導者)が子どもの絵を見る力は、その発達の理解と創作教育に対する意欲が必要である。指導者教育が必要な主な理由は、感動する心や創造行為の感性の働きに対する受け止める力を身につける描画力ことである。従って(その1)に続き基本形のデッサン学習から〈物の形に輪郭線はない〉という考え方を学ぶ教材研究として『球体』を解説した。実習で学ぶ創造性や感性といった創作力は心を育てることであり、訓練により自ら獲得して身につける他ない。

『ぬり絵』を幼・童画教育の一環とする考え方は、あり得ないのだが、幼児画の発達段階の無理解や、指導者の未熟さから生じる〈悪しき風習〉であると断言する。絵画は創造性や感性に深く係るが、絵画教育に関係ない『ぬり絵』は、教育上何ら意味が無いばかりか、幼児期に最も悪影響を及ぼす単なる労働に過ぎない〈時間つぶし〉である。創造教育の対極にあると考えると、一般の大人や保育に携わる方々に対する啓蒙活動はこれからも必要且つ不可避な事と考えている。

参考文献：

- 『子どもの絵の心理学』フィリップ・ワロン著、加藤義信、井川真由美共訳、白水社2002
- 『チゼックの美術教育』W・ヴィオラ著、久保貞次郎、深田尚彦訳、黎明書房1999
- 『子どもの絵』V・ローエンフェルド著、勝見勝訳、白揚社1975
- 『美術による人間形成』V・ローエンフェルド著、竹内清、堀内敏、武井勝雄共訳、黎明書房1963
- 『芸術による教育』ハーバード・リード著、植村鷹千代、水沢孝策訳美術出版社1979
- 『なぐり描きの発達過程』W・グレッツィンゲル著、黎明書房1970
- 『児童画の発達過程』なぐり描きからピクチャーへ、ローダ・ケログ、深田尚英訳、黎明書房1971
- 『保育内容シリーズ⑥造形』谷田貝公昭監修、おかもとみわこ編、一藝社2004
- 『保育をひらく造形表現』横英子著、萌文書林2010
- 『子どもが絵を描くとき』磯部錦司著、一藝社2008
- 『表現・幼児造形』〈理論編〉編著林林男、保育出版社2008
- 『保育内容「表現」』平田智久、小林紀子、砂上史子、ミネルバ書房2010
- 『幼児の造形』-造形活動による子どもの育ち-編著、野村和子、中谷孝子、保育出版社2009
- 『表現 幼児造形』理論編、鯉坂二夫監修、林林男編、保育出版社2008
- 『表現 幼児造形』実習編、鯉坂二夫監修、永井肇編著、保育出版社2008
- 『絵でわかる伸びる子どもの秘密』大野元明著、実業之日本社、1980
- 『色彩の心理』編者代表、久保貞次郎、文化書房博文社1974
- 『子どもの絵の伸ばし方』岡田清著、創元社1955
- 『子どもの絵の見方』岡田清著、創元社1967
- 『児童画の心理と教育』霜田静志著、金子書房1975

『小学校図画工作指導の研究とその実践』熊本高
工監修、萩原 栄編著、葵書房1972
『デッサンのすすめ』伊藤廉著・美術出版社1968
『絵画』（デッサン編Ⅰ）武蔵野美術大学刊行1970
『石膏デッサンの描き方Ⅰ』（アトリエNo599）根
岸正解説・美術出版社1977
『初級技法講座「デッサン」用具と描き方』村松
昭三著・美術出版社1995
『幼稚園教育要領』原本、文部科学省、『保育所
保育指針』原本、厚生労働省、チャイルド本社、
2008
『保育所保育指針』解説書、厚生労働省編、フレ
ーベル館2008
『幼稚園教育要領』『保育所保育指針』解説とポイ
ント、ミネルバ書房編集部編、ミネルバ書房2008
『実践新幼稚園教育要領』監修無藤 隆、学習研
究社2003
『新造形表現』理論実践編、花篤實・岡田愨吾編
著・三晃書房2009

注記

実技実践資料は、主に基礎デッサンに係る内容と
した。対して『ぬり絵』は作例資料に意味や必要
性も無いので、掲載はしていない。また美術教育
に関わる内容で研究の進んだ文献については、複
数の著作から一部引用と抜粋文を中心にした。翻
訳文の表現内容に妥当性を感じたからである。

（了）

Summary

This paper presents the art teaching of early childhood education. The purpose of the creation education for the children is not to teach children how to draw, but to cultivate such a kind of teachers who can read from children's drawing. Reading from children's drawing by teachers links deeply with teaching and support. Pre-service students should learn basic *dessin* and cultivate their sensibility. In this paper, the teaching method of drawing a sphere has been stated through the practice. The line of ellipse and the structure of sphere has been shown in this practice. Meanwhile, the fruit, as a closer member of sphere, is given as an example to explain the view of *dessin*. On the other hand, drawing expressions prefer the sense of third dimension by *aspect*, *qualite* and *masse* to the silhouette as the *forme* of object. Recently, there are some reports in regard to the drawing for colouring which has been introduced in the nursery schools and kindergartens. On my view, the drawing for colouring, as a way to express the outline does not concern with children's creativeness which will pose a negative effect on children's development. Therefore, the drawing for colouring does not prove its worth to education, since it is used to pass the time for children. Thus it can be seen that the drawing for colouring is a bad custom originated from the misunderstood of the development of children and the inexperience of teachers. Finally, in order to explain that the drawing for colouring is not the creation education, a few key extracts has been selected.